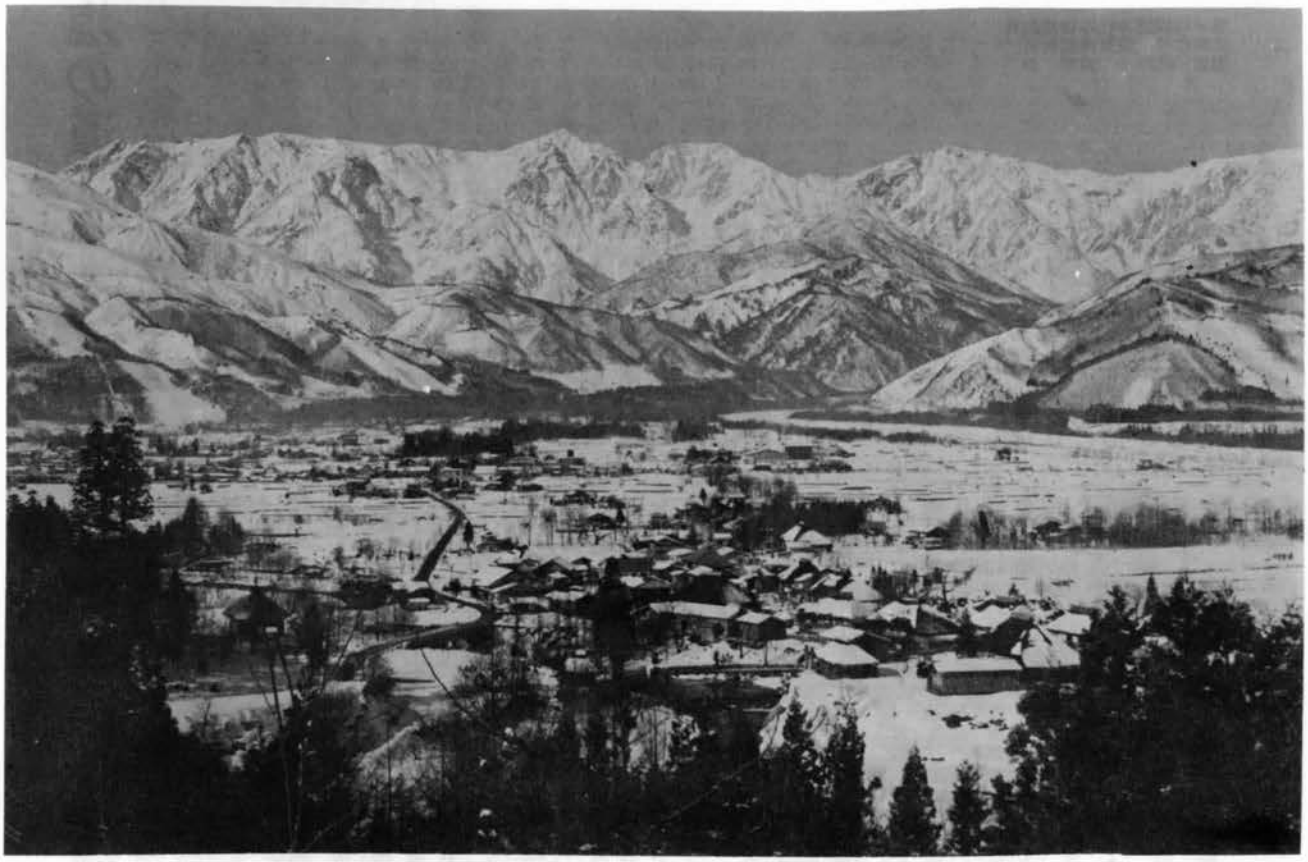
①　毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

# 山と博物館

第22巻　第12号　　1977年12月25日　　大町山岳博物館



千国街道沿いの白馬三山　　撮影　伊藤美嗣

## 千国街道を写す

青木湖畔に点在する石仏を写すことから、私と千国街道とのかかわりがはじまった。

約百五十年前に造られた三十三体の石仏は時刻により、季節により、その表情を変えて私をむかえてくれるし、そこへ行けば心が安らぐので、自然に足が向いた。そして、お目あての石仏にピントを合せ、息をころして、そっとシャッターを押すと、その金属音が林の中に響き、手ごたえと充実感を味わうことができた。

春――まわりの雪を解かしながら石仏があらわれ、夏――蝉時雨の中、木もれ陽の中にたたずむ、秋――白壁に柿の実が映えるころ落葉が石仏の肩にとまり、冬――スキー場の喧噪から逃れて雪の中に埋まる。

この石仏たちが並んでいる千国街道は、松本城下から糸魚川に達する三十里五町、約百二十キロメートルの道で、特に大町以北には昔のおもかげを残しているところが多く、街道ぞいには各種の石仏をはじめ、道祖神や庚申塔、白壁の土蔵、わらぶき屋根の家などがある。道も細く、石畳や轍のついたところもあって、変化にとんでいる。この道を歩くとき、昔の人々の信仰心や生活をも、うかがい知ることができる。

このように被写体には事欠かないのだが、私の写真は単なる記録写真の範囲を出ない。そして、近ごろは急速に街道界隈の風景が変わってきて、私のイメージとは、かけはなれたものになりつつある。風景に限らず、人々の生活などにもカメラを向けたいと思うのだが、思うようにはいかず、いらだたしさをおぼえる。

新しい建設や生活のために、古いものが壊されるのは歴史のルールかもしれない。しかし、我々、写真愛好者としては、その変化に遅れないよう、現在を記録し、残しておく必要があると思う。

このような仕事は消極的のようだが、十年後、二十年後にはその写真が貴重な資料としての価値をもつだろう。

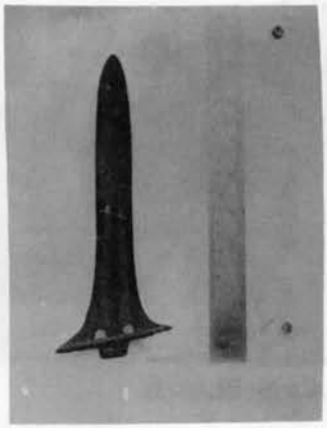
（大町青年写真愛好会　丸山隆士）

長野県北安曇郡

# 小谷地方の塩の道

## ―千国街道と糸魚川道―

青木　治



海ノ口諏訪神社の狭鋒銅鉾
大町市平　諏訪神社所有
撮影　昭30.8　青木　治

### 一古代の交通路

日本海に面する糸魚川方面から、大町、松本方面に出るには、昔から姫川を遡り、佐野坂を越え、仁科三湖の岸辺を通り、大町附近から安曇平に出たであろう。

穂高見命を祖神とする安曇族は、古代以前より栄え、奈良時代に及んでいるが、平安時代にはその勢は下り坂であったが、それでも、延喜式（平安時代醍醐天皇の延長五（九二七）年選完）に、「信濃国三八座（大七座・小三一座）安曇二座、穂高神社大名神」と記され、朝廷より幣帛を奉らるべき名神として、全国二八五座のうちに列せられ、且つての勢威を見せている。

この安曇族は且つて海神族として、北九州に栄えたが、漸次に日本海通・瀬戸内通・大平洋岸の三方面より、日本列島の東方に移り、その一部の信濃に永住したのが安曇郡（高家郷・前科郷・八原郷・村上郷）の安曇族である。

この安曇族は一説によると北九州から、日本海の沿岸添いに、東へ進み、能登半島を廻り、糸魚川より、姫川を遡り、安曇平に出て、穂高神社を祖神として定住したという。

安曇族は玉を愛し、青銅器文化を持っていたというが、安曇野の各地の遺跡や石墳から姫川沿岸の小瀧附近の原石で作った碧玉が屢々発掘されていることや、大町市平区海の口の諏訪神社の社宝の狭鋒銅鉾があること等は、安曇族の安曇野に入った道筋を示すものであると同時に交通路をも示すものである。

斯く塩の道の原型は太古・古代から出来ていたと考えられる。

### 二千国街道と糸魚川街道

千国街道（千国道・千国大道）の起点は、今の小谷村南小谷千国であって、可成古い道である。糸魚川街道（国道一四七号線、一四八号線）は糸魚川・松本間の道で明治の初めの新しい道である。その呼び方は長野県側は糸魚川街道といい、糸魚川では松本街道と呼んでいる。

千国大道という言葉の出て来る最も古い文書は、三宮穂高社御造営日記（文明一五（一四八三）年）である。その末尾に次の如く記されている。

「穂高郷四至堺ノ事、東ハ千国大道ヲサカフ、南ハ柏原ノ新居ノ沢ヲサカフ、上ハ田中ノ南穂高セキヲサカフ…（後略）」

この文章からいって、この道は文明一五年の頃は穂高神社の東を南に抜けていたことが判る。

小谷、四ケ庄方面から大町附近に出たこの道は安曇野を南に向って縦断し、塩尻・松本方面に向っているが、時代により、その道筋に移動があるが、古い最初のものは、北アルプスの山麓に添って南に走っている。時代が下がるに従って東に下がり安曇野の中央部を通るようになっている。従って千国街道と称せられる道筋は今では、安曇平では三筋位に分れている。

次にこの両街道を含めて、糸魚川より、小谷方面に入った道筋を示すと次の如くである。

**その一（鳥越峠・地蔵峠越へ道）**

糸魚川→仁王堂→上町屋→[山口]（番所・関所）→別所→大久保→白池→鳥越峠（安房峠）→横川→地蔵峠（御坂峠）→深原→埋橋→中谷→長崎→土谷→宮本→和平→雨中→蕨平→[千国]（番所）→沓掛→百体観音→落倉→切久保

糸魚川から大久保までは、新潟県内である。山口の番所で検査された人や荷物は、別所・大久保を経て長野県側に入り、鳥越峠・地蔵峠を越え、中土方面を経て、千国の番所で再検査し、白馬村北城切久保を経て南に向っている。この鳥越峠・地蔵峠を越え中土方面から千国に至る道筋が最も古いといわれている。

**その二（大網峠越へ道）**

糸魚川…（最初はその一と同じ）…大久保→白池→角間池→大網峠→大網→平倉→葛葉峠→湯原→塩坂→来馬→石坂→池原→車坂→下里瀬→和平→雨中→蕨平→[千国]（番所）…（以下その一と同じ）

小谷の大網峠を越え、大網へ出て、更に新潟県の平岩、葛葉峠を越え、また小谷側に入り、千国に出る道筋である。戦国時代から江戸時代にかけ最も栄えた道筋で、大網は物資の中継地とし栄えていた。大きな牛宿もあり、且つての塩蔵も現存している。

**その三**

糸魚川―[虫川]（番所）→菅沼→小瀧→平岩→葛葉峠―…（以下その二と同じ）

**その四（糸魚川街道）**

糸魚川→根小屋→平岩…国道一四八号線

明治時代に入って糸魚川街道として、急速に整備される。今の国道一四八号線。

### 三塩の道の物資とボッカ（歩荷）と牛方

上杉謙信が武田信玄支配下にある、信州の大町、松本、塩尻方面に対戦中に塩を送ったという話は有名であるが、糸魚川にある信州問屋由来記鑑には次の如く記されている。

「（前略）…甲州武田勢川中島まで発向なり、されど上杉の勇猛、武田の武威何れか劣るべき、天下に秀でし名将なれども双方にらみ合い、民百姓までも出入を留め幾度か〳〵対陣あること数年なり、武田には何にても不足なかりしが、一つ不足は四方敵に取囲まれ、海辺知り給わず、塩のみ御こまり、信州国中の民百姓は命渇に及ぶ由、追々城代より願出で余儀なく信玄公より謙信公へ御たのみなされ候に付き、謙信公は理非正道の大将にて合戦は格別、たとえ敵国たりとも国民難渋を見すてがたく、早速御許容なし下され、塩御送りなされべく御契約なりしが、川中島は合戦最中にて通用悪しく、西浜糸魚川の出入は、其の昔行基菩薩の御作りの像ありける地蔵峠と申道有り、又外に大網峠の道もありければ、百姓信州よりまかり下り、塩荷物背負い、或は牛馬追い下りつけ越しければ、信州の民百姓よろこびて誠に子の親を見つけし心地なり、…（後見）…」

この文は上杉謙信の赤き心を上手に表現しているが、一方山国信州の民百姓が越後よりの塩を食生活上強く求めていたこと、越後側の人々も信州側に送る塩の経済的の高さを十分認識している点が文の背後にひそんでいる。

輸送路も地蔵峠越し（その二）と大網峠越し（その二）とされている。輸送方法も人の背によるボッカと牛方によると記されている。

安政の頃越後の山口番所を通過し、信州小谷側に入った荷物について、次の如く記されている。

「塩約八千駄・正月鰤二百五十駄・三百駄、その他海産物の塩物乾物等の四十物等」

また信州よりの帰荷の物資は

「煙草・大豆・生薬・蕪土（以上が一番多か

ったという）綿（更に次ぐ物が綿であったという）・麻・紙・小豆・木曽物・木地・反物かい棒・元結・板子等」

これ等の荷物は山口と千国の番所で荷改をし、それ〴〵大町・松本方面、糸魚川方面に出されている。

小谷村横川の塩文書を示すと、次の如くである。

「塩之出入覚帳明治一九（一八八六）年小池満寺文書

横川幸屋家
牛方
一全地塩弐級（駄）井口村孫左衛門
八月二十七日受取奉納村山崎又三郎行
牛方
一松倉地塩　五駄　下沢村全五右ヱ門持
九月一日受取
奉納村横川清左ヱ門行
牛方栗山村四郎平
五四号
一竹原塩二駄　中村出
五五号囲印
一竹原塩一駄　来馬村　大家行
賃金四円大町迄ヨリ九月二日受取九月七日送る
牛方
∴ノ四号
（中略）
牛方
一仁竹原塩三駄　栗山村　四郎平
「丁出
同一七号　此内一駄は九右ヱ門ヲロシ
一仁竹原塩二駄　来馬村大家とし入
九月六日受取九日送る
（中略）
へ五七号　牛方
一◬竹原塩二駄　上条孫次郎付
へ五八号
一◬竹原塩二駄
へ五九号
一◬竹原塩二駄　中村出
十一月十二日来馬村大家行」

塩蔵
現存する塩倉は大網にただひとつ二階建で下は牛小屋、上は塩倉で塩を入れるため釘が使われていない独特の建造である。
今は屋はトタン葺に改造されているがこの写真は昔のものである。
小谷村大網武田治氏所有
撮影　昭30.8　青木　治

この文章に出て来る地塩とは、越後加賀の日本海産の塩をいい、竹原塩とは瀬戸内海産の塩で、今の広島県竹原市の塩田で取れた塩である。この塩の輸送には、大阪港を起点とする西廻り航路を利用し、竹原港で積荷した塩は、下関より日本海に出て、能登半島を廻り、糸魚川港で陸上げされている。

糸魚川からの物資、特に塩の大部分は牛方により牛の背で輸送されている。その輸送路は、江戸時代以降は前記その二の大網峠を越えて大網に出る道筋が、多く利用されるようになっている。越後の根知谷の山口（関所・番所）を起点とし、多くの荷物はここで点検され、大網に入るのであるが、多くはここで継荷され、更に千国まで送られるのであるが、糸魚川・大網間の輸送担当者は、前記「塩之八覚帳」に記されているように、井口村、下沢村、栗山村等々の根知谷の村々の牛方があたっている。

大網以南への輸送は信州側の牛方が行う慣例であった。また大網以南は大きく千国行荷物と大町行荷物に二分されていたが、前者の輸送は大網・千国間の村々の牛方があたり、後者は千国・大町間の村々の牛方があたっていた。

また乾物・塩物その他の物資も以上の方法であったし、信州よりの帰荷の輸送分担も同様であった。

「牛追御改帳　宝永四（一七〇七）年
越後糸魚川より松本大町迄塩売牛追
戸土村　助之亟　九年前より
戸土村　善右ヱ門　七年前より
横川村　角之亟　八年前より
仝　次郎兵衛　五年前より
仝　十兵衛　九年前より
仝　久右衛門　七年前より」

この資料によると、藩からもらう、牛師の鑑札は越後糸魚川より松本・大町迄となっている。輸送の方法は、継荷と通荷と両方法を取っていたので、糸魚川・松本間に通用出来る鑑札となっていた。

横川の古老（小池満寿氏）の話
「牛　ヒトメエは六頭
ツツカラカシ一俵は十六貫（塩のこと）
炭は背中で別所まで
夏は牛方、冬はボッカ」

一人前の牛方は六頭の牛を追って、つづら折の山道を歩いたのであるが、中々苦労が多かったようである。急斜面の道は、夕立等で砂が流れ溝になるのを防ぐため、拳大の小石を並べて堅めていたし、時に山犬（狼）に襲われた話なども残っている。

塩は一俵一六貫（六四kg）で、牛の荷鞍の両側に一俵づつつけたのであるから、一頭の牛は三二貫（一二八kg）を運ぶことになる。

横川の人々は炭を売るために、越後根知谷の別所まで背中（ボッカ）で運んできて売ったという。夏は牛師の鑑札を持った牛方が主に、運送にあたって居ったし、冬は雪が多いので牛より、人間の背で運ぶ方が多かったという。

また中馬嫁業の牛方のために、問屋の厩に繋がれた。牛の餌の草を刈って売った話も横川には残っていた。糸魚川・大町間は多くは牛を使っていたようであるし、大町以南は馬が殆んであったようである。小谷方面では、牛の需川は地牛は勿論、能登牛、遠くは秋田南部牛も移入されている。

「南部秋田山下買入道中諸掛（文政七（一八二四）年大網武田信一文書）」

この古文書を見ると、この時秋田の南部牛四二匹を購入して来て、糸魚川から小谷にもって来たことが記されている。

ボッカ（歩荷）による輸送は牛方と同時に行われてもいたが、冬の積雪期が主であった。

殊に大町・松本地方での正月の年取魚であった鰤は、富山湾近海で漁獲された寒鰤を、豪雪の雪中をボッカによって運ばれることが多かった。

雪の無い一〇月下旬から一二月中旬頃までの間は「継荷」により糸魚川・大町間の一二ケ村が継荷宿を指定し、リレー輸送をしたが、雪が降り多くなる一二月中旬以降は糸魚川から届先まで輸送する「通荷」とされていた。この場合は人の背によるボッカ輸送が殆んどであったという。

（北安曇誌編集委員・穂高町郷土資料館長）

牛鞍、首木、背負子（いこ）
小谷村郷土館所有
撮影　昭51.11.13青木　治

# 礼文島の植物とその地史的分布（2）

横内斉
小林悦郎

ハイマツ　礼文岳頂上附近（450m）

**礼文島の植物目録と分布系統略号**

**シダ植物**

ハナヤスリ科　ヒメハナワラビ（大）、エゾノフユノハナワラビ（大）。
コケシノブ科　コケシノブ（南）。
オシダ科　オオメシダ（北）、オクヤマシダ（北）、ホソイノデ（大）、ミヤマイワデンダ（大）、エゾイワデンダ（日）。
チャセンシダ科　コタニワタリ（大）。
ウラボシ科　エゾデンダ（大）。
ワラビ科　イワガネゼンマイ（大）、リシリシノブ（大）。
ヒカゲノカズラ科　タカネスギカズラ（無）
イワヒバ科　エゾノヒモカズラ（大）、エゾヒメクラマゴケ（大）。

**種子植物**

**裸子植物**

イチイ科　イチイ（北マ）。
マツ科　ハイマツ（北）、トドマツ（北）、アカエゾマツ（北マ）、エゾマツ（北マ）。
ヒノキ科　リシリビャクシン（大）、ミヤマビャクシン（北マ）。

**離弁花植物**

センリョウ科　ヒトリシズカ（北）。
ヤナギ科　ドロヤナギ（北）、エゾノバッコヤナギ（北マ）、エゾノタカネヤナギ（北マ）、ミヤマヤナギ（北マ）、キツネヤナギ（北マ）、ホソバマルバヤナギ（無）、イスマルバヤナギ（北マ）。
クルミ科　カラフトオニグルミ（無）。
カバノキ科　ケヤマハンノキ（固）、ミヤマハンノキ（北）、ハンノキ（北）、ダケカンバ（北マ）。
ブナ科　ミズナラ（北マ）。
イラクサ科　オオバイラクサ（北）。
ビャクダン科　カマヤリソウ（北）。
タデ科　ムカゴトラノオ（大）、マルバギシギシ（大）、ヒメイワタデ（北）、ウラジロタデ（北）、アミメイブキトラノオ（無）、ホソバオンタデ（無）。
ナデシコ科　ハマハコベ（大）、チシマハマツメクサ（無）、オオバナミミナグサ（北）、タカネナデシコ（大）、タカネツメクサ（蝦）、チシマツメクサ（大）、ハマツメクサ（大）、ウシオツメクサ（大）、ミミナグサ（史）、シラオイハコベ（北）、オオヤマフスマ（大）、シコタンハコベ（北）、カラフトマンテマ（大）、チシママンテマ（北）。
スイレン科　ネムロコウホネ（大）。
キンポウゲ科　エゾトリカブト（北）、アカミノルイヨウショウマ（大）、エゾノハクサンイチゲ（北マ）、エゾイチゲ（北マ）、ミヤマオダマキ（北マ）、ミツバオウレン（大）、ベニバナヤマシャクヤク（北）、ツクモグサ（北マ）、ハイキンポウゲ（北マ）、ハクサンイチゲ（大）、ミヤマキンポウゲ（北マ）、レブンカラマツ（固）、ボタンキンバイソウ（固）。
モクレン科　チョウセンゴミシ（北）。
ケシ科　エゾエンゴサク（北）、エゾキケマン（北）、ツルキケマン（日）。
アブラナ科　ヤマハタザオ（大）、ミヤマハタザオ（大）、ハマハタザオ（北）、シロバナイスナズナ（大）、ミヤマガラシ（大）、エゾスズシロ（北マ）、ハマタイセイ（北）、タカネグンバイ（大）、ナズナ（史）。
モウセンゴケ科　モウセンゴケ（大）。
ベンケイソウ科　アオノイワレンゲ（北マ）
コモチレンゲ（裏）、イワベンケイ（大）、エゾキリンソウ（北）。
ユキノシタ科　ウメバチソウ（大）、アラシグサ（北マ）、エゾスグリ（大）、トガスグリ（北マ）、シコタンソウ（北マ）、トリアシショウマ（北マ）、ダイモンジソウ（日）、イワガラミ（南）、エゾクロクモソウ（北マ）、チシマイワブキ（北）、ヤマハナソウ（北マ）。
バラ科　エゾノマルバシモツケ（北マ）、エゾホザキナナカマド（無）、エゾシモツケ（北マ）、ミヤマナナカマド（北マ）、タカネナナカマド（北）、チョウノスケソウ（北）、オニシモツケ（北）、ノウゴウイチゴ（北マ）、カラフトダイコンソウ（北）、イワキンバイ（固）、ウラジロキンバイ（大）、オオタカネバラ（大）、ハマナス（北）、ホロムイイチゴ（大）、コガネイチゴ（大）、ヒメゴヨウイチゴ（北マ）、リシリトウチソウ（北マ）、チングルマ（北）、コキンバイ（大）、チシマザクラ（北マ）、シュウリザクラ（北）。

（東蒲原郡四賀村）

ホテイアツモリ　高山

チシマフウロ　高山

山と博物館第22巻第12号
一九七七年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(2)〇二一　大町山岳博物館
印刷所　大町市後町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）